

保育あきた瓦版

第62号 令和4年12月 秋田県保育協議会 広報委員会

「課題解決にむけた各園の取り組みを」



秋田県保育協議会 副会長 高橋大成

新型コロナウイルスとの闘いは間もなく3年の月日が経とうとしています。現在は第8波がピークを迎えており、就学前教育・保育施設にあってもクラスターの発生が続き、日々の感染対策など、現場の対応を継続せざるを得ません。薬の開発等により、少しでも状況が改善されることを願うばかりですが、もしばらくは「ウィズ・コロナ」の保育を模索する日々が続くことでしょう。

そうした中、静岡県の保育園において虐待・暴行で保育士3人が逮捕されるという耳を疑うような事件が起きました。昨年来の通園バスの事故もあり、子どもを通わせる全国の保護者の間にも不安が広がる由々しき事態となっています。今後、調査が行われ、行政による指導が強められることは必至でしょう。

こうした「不適切な保育」への対応については、各園での具体的な取り組みが求められます。まず、園長自らが子どもの人権についての理解と職員・保護者への説明が必要です。園では決して虐待を行わない旨を重要事項説明書に明記し、虐待があった場合の対応等について、年度初めの職員会議などで職員に訓示し記録しておく必要があります。また、全国保育士会が作成した『保育士・認定こども園における人権擁護のためのセルフチェックリスト』などを用いて、職員全員で園内研修を行う取り組みなどが有効となるでしょう。そして何より、自分の園において、そうした状況を生み出す危険がないかをチェックし対策に乗り出すことが重要です。

私の園の取り組みを一例として紹介すれば、3歳未満児の保育を“ゆとり”あるものにするため、「流れる日課」を取り入れています。これは全国私立保育連盟が勧めているハンガリーの保育メソッドを参考にしたもので、とくに1・2歳児において一斉に活動するのではなく、1人から2人ずつ排泄や食事、午睡へと導き、遊びと生活の日課において一人一人と丁寧に関わり、子どもが心地よさを感じる中で発達を促す取り組みです。それによって保育者が大きな声で指示を出す必要がなくなり、子ども同士のトラブルも減りました。虐待などにつながる保育者のストレスを軽減するとともに、子どもの健やかな育ちに繋がる一つの方法として、お勧めいたします。

さて、当協議会は来年度から公立・民間の壁を無くす一本化をめざし、協議を続けています。県内の保育施設が力を合わせて様々な課題解決に向けた取り組みを進めていきましょう。皆様のご協力をお願いいたします。



「子どもと保護者が安心できる保育所であるために」

秋田市川添保育所 所長 星川 育子

新型コロナウイルス感染症の脅威にさらされるようになってから、もう 3 年になろうとしています。当初は、命の危険が迫る未知の感染症として恐怖に怯えながら、どうすれば保育所を守れるのか、それだけで頭がいっぱいでした。人が集まることを極力避けながら、時に疑心暗鬼になったり、一方で、対策としてここまでする必要のあるのかと迷ったり、悩んだりする日々の始まりでもありました。

今でも忘れられないのは、異動前に在籍していた施設のその年の卒園式の事です。保護者には参加してもらわないと決定したものの、小規模施設で子どもも保護者も家族同然に過ごしてきた数年間を思うと諦めきれず、職員で考え抜いた結果、卒園児の保護者に玄関外に控えてもらい、会場を式の様子が見えるように設営して、一人一人が卒園証書を手にする姿を見届けてもらうという形でした。分厚く大きな硝子サッシで隔てられはしましたが、小雪舞う玄関先から「心温まる式でした」と保護者からの言葉をもらい、互いに涙したことを昨日のことのように記憶しています。

その後、感染の状況は第〇波と波に例えられながら流行を繰り返し、いまだ終息が見えない状況が続いています。適切な予防策を講じながら保護者参加の行事も実施できるようになってきましたが、直前で中止せざるを得なくなったり、新たな制約を加えての実施となったり、コロナ前と同じように進められていないのが現状です。行事は子どもの成長を確かめ合い、保護者との信頼関係を築く大事な機会でもあります。コロナ前と同様に実施できることを切に願っています。

また、参集型主流で行われていた会議や研修会も、気付けばオンラインでスムーズに行われるようになりました。典型的なアナログ派の自分も必要に迫られて操作を覚え参加していますが、コロナ禍でなければこれほどのスピードで普及することはなかったのではと、複雑な思いもあります。

コロナによって当たり前だった日常は一変しましたが、未来を担う大切な子ども達が安心して登所でき、保護者をサポートできる保育所であるよう、今後も努力を続けていきたいと思えます。



「コロナ禍における保育の充実」

こどものくに保育園
園長 大門ヒサ子

新型コロナウイルスとの共存は3年目を迎え、未だにウイルスを変異させながら第8波に入った、と連日ニュースで報じられています。加えてこの冬はインフルエンザも同時流行か?!といわれています。終わりの見えない毎日ですが、去年の今頃に比べたら確実に良い方向に進んでいるのでは、と感じています。コロナ1年目はほとんどの行事を中止にすることが多かったですが、2年目3年目と反省と課題、実行を重ねて、健康と安全を重要視しながら、子ども達が「満足感」や「達成感」を味わうことができるよう、日々の保育活動から運動会等の行事につながっていくように実践しています。先日保護者アンケートをとりました。行事などで改善できるところは早速ご意見を取り入れて、12月中旬に予定しているクリスマス発表会では、子ども達の保育園での姿や成長した姿を保護者の皆様にお伝えできるよう職員力を合わせ同じ方向に向かってすすんでいるところです。

今回は、コロナ禍の保育の充実につながる取り組みという事で、自園では体を動かしてのびのびあそぶ事、ごっこあそびなどで夢中になって友だちや保育士と楽しむ日々の体験こそが、一人ひとりの健やかな育ちの原点になっていると考えています。いっぱいあそび、お腹が空くのを感じ給食を美味しく食べる、そしてぐっすり眠る、この満足感で心身いっぱいになることが、様々な感染症に負けない丈夫な体づくりにつながっていくのでは、と思います。コロナの流行は、決してマイナスな事ばかりでなく、このような日常の保育の大切さを気付かせてくれるきっかけとなりました。引き続き、コロナの最新情報を収集しながら基本的な感染予防をしっかりと行い、なによりも子ども達が安心して自分を出し保育士との深い信頼関係の下で園生活を送り、こころとからだが健やかに育っていけるよう、日々の保育を大切に、子ども達と向き合っていきたいと思っています。





日々研修・日々実践 ～コロナ禍も機ととらえ～

石脇西保育園
園長 織田羽衣子

各種研修会がリモート中心になって以来、研修場所として園長室が利用されています。イヤホンを付け、パソコンに向かって自己紹介したりグループ討議に参加したりしている職員の声の背にしながら、自分もパソコンに向かったり、職員室からそっと園長室に入ってみたり……。次々と研修レポートに取組み適切にまとめ上げ、新たな学びを広げる職員の意欲に感心するばかりです。更に、主任・副主任がそれぞれのレポートが一人一人の確かな学びに繋がるように丁寧に関わっている姿勢にも、感動すら覚えます。自分自身を含め、どの職員にとっても、学生時代も職に就いてからも経験したことのない学びの姿だろうと思います。その成果が園内研修に結びついていることを実感することもしばしばです。当初リモートを研修形態の変化と感じていたことを浅かったなあと自己反省しています。

本園は、石脇福祉会の五園の中の一園です。石脇福祉会には、各園の副主任を中心とした研修委員会が組織されています。「職員の資質向上」をテーマに掲げ、「子どもの心を見つめ合い、保育の質を高めよう」を副題とし、公開保育・保育と食育実習・採用3年目までの初任者とその育成担当者によるフォロー研修・専門リーダー別の研修会等、コロナの状況を捉えながら、途切れることなく研修を積み重ねています。そしてこの11月末には、3年ぶりに法人全体の合同研修会を開催することができました。講師に元秋田大学教授奥山順子氏をお招きし、保育の原点にかえて「遊びとは」を問い直し考え合うことができました。

新たな研修にチャレンジし、何のための研修なのかを問い直し、与えられる研修から求める研修へと質的転換をもたらしたのは、実は苦しめられてきたコロナ禍だったと思えるようになりました。

そしてその根底には、「保育の質を高めたい」という使命感があったということは当然です。

日々の研修が日々の実践につながり、コロナ禍だから問い直した遊びと行事・コロナ禍だから創造できた遊びと行事……。それぞれの園とそれぞれの地域に笑顔が満ちたと誇っているのではないのでしょうか。



コロナ禍の行事

幼保連携型認定こども園 みたけこども園
園長 西村優子

新型コロナウイルスが猛威を振るうまで我が園では年長児が秋田市の大森山動物園に出かけるのが恒例の行事でした。友だちや先生とバスに乗ってのお出かけは、家族で出かけるのとはまた違った楽しみがありました。

新型コロナウイルスが感染し、「バスに大勢で乗るのは密になる。」「出かけた所で他のお客さんといっしょになるのはどうか。」心配だけが先走ってしまい、中止という選択肢しか考えられませんでした。

年長児クラスになったら動物園に行けるという期待を持って春を迎え、ルンルンしている子どもたちを見ると「今年は行けないよ。」とは言えません。ある日、担任が今年に行けないことを伝えると、「やっぱりね、ばい菌うつるといけないからしょうがないね。」という反応に驚きました。担任と子ども達が話し合いをし、自分たちで動物園を作ろうと話しがまとまりました。

どんな動物がいるか図鑑で調べ、色画用紙・段ボール・ポリ袋・廃材を使っての動物づくり、その動物の好みの餌、どんな所に住んでいるか動物もどんどん増え、中には受付担当・おみやげ屋さんの担当の子もいます。ホールに動物別にコーナーを作り、DVDで鳴き声の練習もしました。小さいクラスをお客さんに招いての動物園は大盛況でした。ライオンの迫力満点の演技に泣いてしまう子もいました。

子どもたちが豊かな感性を持ち、感じたことや考えたことを表現できた行事になり、大満足で終わりました。

色々な行事が縮小・中止になり気持ちが減入っていた時「先生、僕たちは楽しいよ。始めてやることもいっぱいあるから」と言ってくれました。暗くなってばかりいた自分が恥ずかしくなり、考え方をマイナスからプラスに変えていこうと思いました。

『明日もがんばるぞ！』

～ みたけ動物園へようこそ ～



木の家に隠れるへびの兄弟



ライオンの家族



コロナ禍における保育と研修

花輪にこにこ保育園

園長 島山睦子

主任を経て現在園長2年目ですが、新型コロナウイルス感染症が蔓延したこの3年間は、無知で勉強不足な私にとっては苦しい3年間でした。

これまでのコロナ禍において、園児はどこへも行けない、園には誰も呼べない、他園との交流もできないという最悪の状態でした。さらに、園内外の行事を中止または縮小することで子どもの安全に繋がってきました。

一昨年、昨年の行事はとにかく中止が多かったですね。子ども達の姿が実際に見られる行事を楽しみにしている保護者の方々には、大変残念な思いをさせていただきましたが、今年度は中止ではなく、規制はあっても縮小や時間差などの形で1つでも多くの行事を行い、我が子の成長を感じてもらえたらと思い取り組んできました。親子遠足、保育参観、運動会、他園との交流... まだまだ以前のような保育とはいかず先は長いかもしれませんが、確実に少しずつ前進していることを願うばかりです。

私たち保育士の取り組み方や考え方が、子ども達を感染症から守るだけでなく「守りながらも安全に楽しんでもらいたい、保護者に伝えたい」という私たちの本来あるべき姿に戻ってきていると今さらながら感じています。

様々なことにワクワクしたりドキドキしたりする子どもの素敵な笑顔が、もっとたくさん見られる世の中になることをモチベーションにしていけたらいいですね。

子どものみでなく我々自身の研修においても、中止ではなくオンライン研修という新たな形で取り組めるように働きかけて下さった秋田県保育協議会事務局の皆さん、各委員会の方々に感謝しかありません。でも欲を言えば、オンラインではなく皆さんとお会いできることを楽しみにしたいです。コロナとうまく付き合える日が早く来ますように…。



コロナ禍で思うこと

幼保連携型認定こども園 四ツ屋こども園
園長 高橋朝子

コロナ禍に入り 3 年目の冬を迎えようとしております。感染症が流行し始めた時にはとにかく感染を持ち込まないこと広げないことが最優先で、様々な行事の縮小、そして中止と保護者の皆さんの残念な気持ちはもちろんですが、準備を進めながらも開催できない職員のメンタル面においても相当きついものがありました。

三年目を迎えた今日ではまた少し変わり、制限されていたものが感染対策を取りながら少しずつ緩和され再開されつつあります。

行事についても、各年齢での入れ替え制の「お楽しみ会」や「運動会」、現地集合現地解散の「親子遠足」などコロナ禍前は考えたことのない行事の持ち方であり、実施した一年目は保護者の反応が気になるころでした。意外にも保護者からは好評価であり、コロナ禍で、行事の持ち方を考えさせられたような気がしました。最善と思ってやってきたことでも、時代と状況・ニーズに合わせて見直し、子ども達の最善の利益を考え対応していくことが大事だと感じたところでした。

これからまた新たな試練が来ることが予想されます。このコロナ禍で、人と人とのつながりや関わりが薄れ、保護者同士が子どもの成長について語り合ったり喜び合ったりしていた温かな光景が少なくなってきました。関係性の希薄化が進んできているように感じます。人と人とのつながりを切らすことのないように、地域の子育て支援の拠点として、保護者の皆様や地域の皆様に安心して頂ける園作りに今後も努めてまいりたいと思います。



『コロナ禍』という渦からの脱出

男鹿市立若美南保育園
園長 仲塚鈴香

コロナ感染症の脅威にさらされ続けて早3年。世の中全部が今まで経験したことのない世界へ突入してしまった。マスク着用が当たり前。どこに行っても消毒三昧。今まで当たり前に行っていたことがやれない。何をやるにも試行錯誤。もちろん保育園生活も・・・

初めの頃は子ども達や保護者の安心安全を守るためにもと感染対策ばかり重視した保育を行ってきた。特に園行事に関してはあれもこれも即中止。それが最善策だと思っていた。同時に制限や約束事が増え、今思えば全世界がコロナの渦にどっぷり飲み込まれていた。

フツとその渦がおおやかになった時、目の前にいる天真爛漫な子どもの姿を見てハッとした。私たちは何を流されていたのだろうか。『コロナ禍』であろうがなかろうが子どもたちの成長は止まらない。子どもはありとあらゆる経験を通して成長するものだったのに。『コロナ禍』という誇大化された言葉に惑わされていたことに気が付いた。

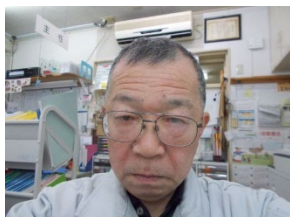
まずは、巨大な『コロナ禍』という渦の中から職員たちを引き上げることから始めた。コロナが発生するたび近々にある行事や活動を即「中止」という選択肢しか出ないほどどっぷり頭の先まで浸っている職員の救出。

すべては『子どもが基本』に立ち返り、子どもにとっての最善策を考えよう！！と事あるごとに職員間で話し合った。基本に立ち返ったことで、今まで見えなかった保育の課題や問題点が浮かび上がるなど良い流れが出来るとともに、いつの間にか職員の中から、「中止」という選択肢がなくなっていた。子どものために出来ることは何か？必要な経験は何か？そのためにはどうしたら良いのか？すっかり禍々しい渦から脱出していた。

初めは恐怖に感じていた『コロナ禍』も今思えば、たくさんの気づきや工夫、今まで自分たちがやってきたことの見直しや確認ができたすばらしい・・・とは言いすぎだが、過渡期だったと思う。

自分達のあるべき姿、子どもに対しての思いを職員が改めて共通理解し、まだまだ先の見えない『コロナ禍』を園長である自分が船頭になり、舵を切りながら乗り越えていきたいと思っている。

コロナ禍における園の取り組みについて



アソカ保育園 熊谷幹雄

新型コロナウイルス感染症がまだ収束されておられません。益々感染が広まっております。本園ではこの3年間、次のような取り組みをして感染予防対策を講じてきました。

1. 各園内行事の縮小

遠足・夏まつり・運動会・保護者参観・おゆうぎ会など保護者参加型行事については、密を回避するために参観者の制限や各クラス単位での開催など感染予防に努めて参りました。保護者参加型の行事についてはDVDを配布し園行事の様子を伝えました。

2. 登園・降園における玄関先対応

新型コロナウイルス感染症予防のため、以前は保育室まで保護者の送り迎えを実施しておりましたが、現在は、玄関先対応にしております。保育室廊下壁面に園児の作品やお知らせなど掲示しておりましたが、保護者に閲覧する機会が無く苦慮しております。現在、玄関にスペースを確保しながら掲示を工夫しております。また、園児・外来者については、玄関に置いて体調の状況の聞き取り及び検温を実施しております。

3. 保護者への新型コロナウイルス感染症予防対策の啓蒙

保護者への感染予防対策について常にお知らせを常時発信しております。

- ・3歳以上児のマスク着用の御願い
- ・登園前の検温依頼
- ・家庭での生活状況(家族の発熱や家族が休みの時には家庭保育のおねがい)
- ・家族旅行についての園への届け出

新型コロナウイルス感染症連日が増えています。8月には、行動制限を無くしており、感染者の療養期間の緩和・濃厚接触者の待機期間の緩和など行政では経済活動に重点を置いて動いております。経済活動と感染予防対策を両立することが大変困難な課題となっております。

これから通常の保育活動を展開出来ることを希望いたしまして、新型コロナウイルス感染症が収束することを願ってやみません。



コロナ禍の保育

幼保連携型認定こども園ふじ
園長 佐川ひとみ

新型コロナウイルスの感染が拡大しだして3年になります。未知のウイルス感染症に対して手探りながら必死の思いで感染拡大防止をしてまいりました。

思い返すと様々なことがありました。園が安全で安心して子どもを預ける施設でいるために毎日試行錯誤を繰り返しました。

同じくして、弊園は保育園から幼保連携型認定こども園に移行しようとする時期でした。今まで以上に子どもの命をまもり、そして育ちを保障する園であるための様々な取り組みを園全体、職員全体で取り組みました。

子どもが真ん中の保育を毎日職員が考え抜きました。職員が主体的に考えた保育は目の前の子どもたちが真ん中の保育でした。振り返りで想定していたことと違ってそこはさらに考えを深めることができました。

園長として3歳以上児の3クラスに一月に1～2回英語のレッスンに入る私にとっても良い経験となりました。口の動きを見せることができない分、耳をしっかりと使い発音を真似することに集中させるなど考えようによってはじっくりとお話を聞くことができる子どもたちの姿に感動させることがありました。私にとって子どもたちとの英語のレッスンは楽しいライフワークの一つになりました。

コロナ禍でできない事や我慢しなければならないことがたくさんありました。しかし、悪い部分だけを見るのではなく、確かにストレスの多いこともありますが、園の運営方針や行事の在り方を見つめ直す良い機会となりました。

職員はコロナで学校閉鎖や学級閉鎖等で人手不足が続くこともありました。また、保育園からこども園への移行期間で秋田市サポート事業において保育の見直しや園内研修等においての学びや話し合いも数えきれないほど繰り返しました。今、コロナ禍と重なったこれらの時期を振り返ると本当に園全体、職員全員ですべては子どもたちのために奮闘してきたと感慨深い思いです。勿論、奮闘は現在進行形ですがベテランを中心に若い職員の日々の保育を見ていると頼もしささえ感じます。そして何より子どもたちがいきいきと楽しく毎日園に通ってきてくれている姿が本当にうれしいです。

こども園ふじに通っている子どもたちの10、20年後を見据えた保育の提供を今後も園全体で追求し続けていきます。

編集後記

本号発行にあたり寄稿して下さった皆様、ありがとうございました。今回は広報委員全員自らが執筆という斬新な企画でお届けすることになりました。「コロナ禍における園運営」の苦労や新たな発想に、共感したり、希望の糸口を見つけ出したりと、今後の施設運営を支えていく上での心の糧にさせていただけたなら幸いに思います。

昨今、保育の現場における痛ましい事故や、あってはならない不適切な保育などの報道が続いております。保育に携わる人々が今一度心をつちにして、子どもの命の尊さと最善の利益を守るべく、共に頑張っていきたいものです。



広報委員名

担当副会長	松橋 千幸	(白岩小百合保育園)
広報委員長	佐川 ひとみ	(幼保連携型認定こども園ふじ)
広報副委員長	星川 育子	(川添保育所)
	大門 ヒサ子	(こどものくに保育園)
委員	仲塚 鈴香	(若美南保育園)
	織田 羽衣子	(石脇西保育園)
	熊谷 幹夫	(アソカ保育園)
	西村 優子	(みたけこども園)
	畠山 睦子	(花輪にこにこ保育園)
	茶谷 洋恵	(城南保育園)
	高橋 さおり	(きみまち子ども園)
	高橋 朝子	(四ツ屋こども園)